

た。また教壇に立つとすぐ、歴史の意味や方向、それを踏まえたうえで各人の姿勢が問いただされた。大学のキャンパスは騒然としていたし、余裕のない、ある意味できわめて生真面目な時代だった。そのころの若き小倉先生が教授会で発言される時の様子が、断片的だが印象に残っている。先生は今と変わらざるものゆかたで、けっして雄弁ではなく、むしろ訥々と話され、小さな問題であっても、それが大事につながりかねないような場合、二つの意味でラディカルに論をすすめられるのが常だった。

キャンパスに平和が戻ってから、私はときとして、フランス語で表記された中国の人名や地名、あるいは、フランス語訳の中国語の文章の原典などについて先生におうかがいした。そんなときの小倉先生のご回答は綿密だった。また、もう千数年もまえのことだが、先生から御著書、『古代中国に生きる』(三省堂)をいただいたりした。戦国から秦・漢にかけての激動期を生きた人物たちを主として史記を中心文献として描き出したもので、項羽や劉邦をはじめ素人の私にもなじみの多い人名がさかんに出て、面白さのあまり一晩で読んでしまった記憶がある。

この御著書は、もちろん小倉先生が専門とされる領域に関するものではあるが、私など門外漢にもわかり易い啓蒙的な書物でもある。しかし私は、はじめてそこに、文学とも通じ合う先生の学風の一隅に触れた思いをいだいたし、それに敬意を表した。

学風といえば、年齢を重ねるにつれていろいろ思い当てることもある。平凡な感想だが、人生は短かく、ひとつのことを悔めるにもあまりにも短すぎる。たとえば、歴史は人間群像から成るととらえ

るのもひとつの見解である。歴史にはもっとマクロな法則があるとか、逆にきわめてミクロな事象の集積であるとか考えるのもひとつの見解である。ところがひとの一生は短かく、選択した見解も十分熟させないうちに、それは批判され、乗り越えられてゆく。学問とはそういうものらしい。

小倉先生にお会いしても、このころは、「お元気でですか?」あ、いまのところは。明日のことはわかりませんが、とか、こういうことに相成る。つねに先生のご健康と今後のご活躍をお祈り申し上げるが、先生の温顔のかけには、自分の果実をひとつ実らせたといい自負がほんのりと輝き出しているようにお見受けするのである。

明文と訥言、あるいは「冬の旅」と「東京音頭」

高橋 新太郎

昭和六十一年四月、学習院大学文学部長の任を終えられた小倉芳彦教授を学習院女子短期大学学長として迎えることが出来た。学長選の選挙管理委員会委員で、日白の文学部長長室に赴き就任を懇請したのは前年の十二月であったと思う。学長選に先立つ教授会で、小倉は理不尽にも教務部長に選任されていた。小倉学長の不仕合せ、難儀の始まりであった。およそ教務部長の職には不似合いの、愚図を自任する男を否応なしにスタッフに抱え込む不運を背負うこととなった。かくて、小倉学長二期五年在任中の三年間、臍かしながら、迷惑をかけることになってしまった。文字通り、面倒を見てもらったのである。小倉学長の几帳面によって、ずばらな小倉が助けられるといったことの連続でまことに、恐縮至極の三年間であった。無頼もどきの小倉が、小倉学長に接して私に学んだことは、もの事の手続きの重要さと、筋を通そうとする粘り強い思考回路の維持とについてであった。短兵急に原則論を説いて白熱するのではなく、無愛想ながら迂路をたどりつつ、本筋に近づけて行く、小倉流の真骨頂を見習いたいと思ったもの今だに身に着かないでいる。

学長着任二年目の春であったと思うが、同僚だった高橋博史さん(現白鳥女子大)と談笑している時に、へこんなショウウバイしているながら、口下手で困るなどという話から、へ研究者で話し下手な人が意外に多いなど、誰彼の品評をしている内に、へそう言えば、ウチのガクチョウも演説はあまりうまい方じゃないね、へまったくそうだね、著書や論文で、あんなに明晰な文章を書くガクチョウが入学式や卒業式の祝辞や告辞の類になると、どうして歯切れが悪くなるんだらう、等、酒が入っているとはいえ、自分の事は棚に上げての言いたい放題。ところがそれで終らず、一週間程後に、学長を閉んで酒を呑んだ折りに、メートルの上がってきたヒロフミさんが、今度は小倉学長御本人にそのことを直言してしまい、あわてたことがあった。それから間もなく、小倉学長から「贅疣録」を頂戴し、「漢文訓読あれこれ」の一文を読むに及んで、ハタと思い当った。そこには、漢文の教師独特の抑揚——小倉も身に覚えのある——朗詠調を嫌う小倉美学を述べてへああいのは、私にはできない。声を出して読む必要があるときは、できるだけバサバサ、ボソボソと、

ひからびた読み方をする。情緒に流されずに、内容を読み取るには、それが適切だと思ふからだ」とある。(「情緒に流されずに」というあたりが、いかにも小倉流で、浪花節好みの小生などの遠く及ばない境地であることをあらためて思い知った。

一般の式辞の演説調を嫌い、できるだけバサバサ、ボソボソとケレン味のない話し振りを、品評し貶しめたのは怪はずみであったと気がついたが、すでに遅かった。

私が学曹院高等科に職を得たのは昭和四十四年の四月で、英語科の服部周一先生と相主管となった。悪童どもから「パーテン」とあだ名されていた、テニス部長でもあった服部先生を中心とした「クラブ服部」の一員として金沢誠先生や高田淳先生ともテニスと酒を楽しんだ。

やがて服部先生が、あの中国思想研究の泰斗であり、詳解漢和大辞典でお世話になった服部宇之吉大先生の直孫であり、高田淳・小倉芳彦両先生が、高田眞治・小倉進平両博士の息であることも知れた。それぞれ、中国哲学研究、朝鮮語学史を体系つけた碩学であることは、無学な小生だに承知していた。小生は、昭和二十九年頃から、近代の文学年表編纂の仕事に関わって、本郷の明治文庫や国会図書館に通いつめたことがあり、明・正・和の古新聞類に目を通していたこととて、新聞の第一面に掲載された服部宇之吉博士が旧朝鮮の初代京城帝國大学総長就任の、シルクハットを手にした英姿を頭に焼き付けており、周一先生の骨相・顔貌が宇之吉博士の写真をじっくりなのに驚きもした。そしてそれは、偶然とはいえ、麻生磯次

院長・末松保和先生をはじめ、旧京城帝大に縁を結ぶ先生方が、よくぞ学曹院に集ったものという感慨にもつながった。多分、金沢・小倉・服部三先生の発起であつたと思うが、高等科に在職した旧教員の有志を集めて年一回の会を開くことになり、十数人で新宿の「玄海」、柴又の「川甚」、新熱海ホテル等々に清遊した。高等科現職では服部先生のほか、鈴木英雄さんと高橋が加わつた。鈴木ヒデさんは、敗戦前の一年半程同じ中学の二年先輩として在籍し、昭和二十年五月二十五日の山の平大空襲によって三木清ら思想犯が収監されていた豊多摩拘留所近くで焼け出された戦災仲間であつた。

そんな高等科につながる御縁があつて、カナザワサン、ハットリサン、タカタサン、オグラサン、ヒデサンと言つた呼び方で親しくさせて頂いた。カナザワサンの呼びかけで、史学科教員の集まりに加えて頂いたこともあつた。オグラサンとのむ機会は、高等科時代は多くはなかつたが、いつもカナザワサンが一緒だったような気がする。オグラサンが掌を組んで、「冬の旅」の一節をバリトンで清唱し、あるいは、ハナノミヤコの「東京音頭」を唄いかつ踊つたのは短大時代のことに属する。昭和の聖代「ケタ生れの悪縁で、オグラサンまた、緒に、ハズカシのあの「東京音頭」を踊りましょ。

小倉短大長時代の教授会決議に発する四年制大学への転換がやっと動き出し、一九九八年に、学曹院女子大学としての出発を果そうとしている。

へオセウニナリマシタ。